

19 日本国特許庁 (JP)

1 特許出願公開

12 公開特許公報 (A)

昭59-222402

Int. Cl.³
A 01 N 25 18識別記号
102庁内整理番号
6667-111

3公開 昭和59年(1984)12月14日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 1 頁)

2 防虫剤組成物

2 特 願 昭58-98489
 2 出 願 昭58(1983)6月2日
 2 発明者 藤原功
 鳴門市大麻町栓字東山田14-18
 2 発明者 浅海伸紀

徳島市川内町加賀須野463-10
 今切寮
 2 発明者 平井啓史
 徳島市住吉1丁目1番10号
 2 出願人 大塚家具工業株式会社
 大阪市東区豊後町10番地
 2 代理人 弁理士 三枝英二 外2名

明細書

発明の名称 防虫剤組成物

特許請求の範囲

(1) 摻散性防虫剤及びアルコールを有効成分として含有して成る防虫剤組成物。

発明の詳細な説明

本発明は防虫剤組成物に関するものである。

摻散性防虫剤の有効成分を長期間保持するためには防虫効果を發揮し得る有効成分の揮散性を維持させることが好ましい。このために従来から採用されて来た方法は、不揮散性若しくは揮散性の固体に防虫剤を保持させる方法が知られている。また摻散性防虫剤の揮散を抑制する方法としてゲル化剤によりゼリー状とする方法、耐熱性樹脂に封緘して保持させる方法、他の界面活性剤を併用する方法、セロファンや和紙等にて包袋する方法等が実用化されている。しかし乍らこの様な方法では充分に前述のいく効果を期待出来ない。

揮散性防虫剤を非揮水性物質である點脂物系物質たとえばロウ、ステアリン酸、ラウリン酸、石油系物質たとえば固形パラフィン等と共存させた場合、揮散性防虫剤の保留効果を得ることが出来る。この場合でも長期間の恒常的揮散特性を得ることは極めて困難であり、一般的には初期の揮散量が多く時間の経過と共に揮散量の減少をきたす。

本発明者は上記難点に注目し、長期間恒常的に安定した揮散特性を發揮し得る防虫剤組成物を開発すべく研究を続けて来た結果、揮散性防虫剤とアルコール類とを併用するときは所期の目的を達成出来ることを見出し、茲に本発明を完成するに至つた。即ち本発明は揮散性防虫剤及びアルコールを有効成分として含有して成る防虫剤組成物に係るものである。

本発明に於いて使用される揮散性防虫剤としては界面活性及び揮散性防虫剤のいずれをも包含し、また防虫剤としては殺虫剤及び防腐剤の両者を介

BEST AVAILABLE COPY

重量部の割合で 10% を採り、加熱溶解後冷却し、25°C に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第 1 表に示す。

第 1 表

(第 1 表) 検出の揮散量(%)

	10日後	20日後	30日後	40日後	50日後
実施例 1	26	47	62	73	86
実施例 2	86	59	79	94	99
比較例 1	69	87	97	99	99
比較例 2	21	32	39	42	44

実施例 3.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、イソサフロール 9 重量部及びポリエチレングリコール(分子量 200) 1 重量部の割合で 10% を採り、混合よく搅拌し、25°C に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第 2 表に示す。

実施例 4.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、イソサフロール 9 重量部及びポリエチレングリコール(分子量 4000) 1 重量部の割合で 10% を採り、加熱溶解後冷却し、25°C に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第 2 表に示す。

比較例 3.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、イソサフロール 9% を採り、25°C に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第 2 表に示す。

比較例 4.

直径 50 mm のガラス製円筒容器にイソサフロール 9 重量部及びパラフィンワックス(融点 155°C) 1 重量部の割合で 10% を採り、加熱溶解後冷却し、25°C に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第 2 表に示す。

第 2 表

(第 2 表) イソサフロール揮散量(%)

	30日後	60日後	90日後	120日後	150日後	180日後
実施例 3	33	56	78	80	97	99
実施例 4	26	48	58	70	82	95
比較例 3	71	88	95	98	99	100
比較例 4	18	30	35	86	37	38

実施例 5.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド 9 重量部、界面活性剤(エマルゲン 404) 3 重量部及びポリエチレングリコール(分子量 200) 3 重量部の割合で 16% を採り、これをよく混合搅拌しつつ水 16% を加え、全量 30% の乳化液とした。これを 35°C、73% RH に恒温恒湿制御された雰囲気中に放置し、経日的に揮散量を測定した。結果を第 3 表に示す。

実施例 6.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド 9% を採り、これを 35°C、73% RH に恒温恒湿制御された雰囲気中に放置し、経日的に揮散量を測定した。結果を第 3 表に示す。

比較例 5.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド 9% を採り、これを 35°C、73% RH に恒温恒湿制御された雰囲気中に放置し、経日的に揮散量を測定した。結果を第 3 表に示す。

比較例 6.

直径 50 mm のガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド 9 重量部、界面活性剤(エマルゲン 404) 8 重量部及び流動パラフィン 8 重量部の割合で 16% を採り、これをよく混合搅拌しつ

つ水 15% を加え、全量 30% の乳化板とした。
 これを 35°C、73% RH に恒温恒湿槽された
 開気中に放置し、毎日的に揮散量を測定した。
 結果を第 3 表に示す。

第 3 表

(第 3 表) N-ジエチルトルアミドの揮散量 (%)

	30日後	60日後	90日後	120日後	150日後	180日後
実施例 5	22	39	52	62	72	81
実施例 6	13	22	31	38	44	54
比較例 5	35	60	75	86	94	98
比較例 6	10	15	16	18	18	19

(以上)